

平成 21 年 6 月 22 日現在

研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19360272
 研究課題名（和文） 景観政策と経済発展の整合性に関する日仏比較研究
 研究課題名（英文） Comparative study of Japan and France on the conformity between landscape conservation and economic development
 研究代表者
 篠原 修 (SHINOHARA OSAMU)
 政策研究大学院大学・政策研究科・教授
 研究者番号：70101110

研究成果の概要：

わが国では往々にして対立しがちな景観保全と経済的発展をいかに持続的に両立させていくかという視点から、わが国の都市部の事例として金沢市を、地方都市の事例として近江八幡市を、そしてフランスの都市部の事例としてナンシー市を、地方都市の事例としてフランス・アヌシー地方を取り上げ、両国における自治体レベルの景観行政の到達点と実施上の問題を整理するとともに、両者の比較検討によるわが国への政策的インプリケーションの導出を試みた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2008年度	1,900,000	570,000	2,470,000
年度			
年度			
年度			
総計	4,800,000	1,440,000	6,240,000

研究分野：景観設計論

科研費の分科・細目：建築学・都市計画・建築計画

キーワード：景観、文化的景観、フランス、経済発展、文化財

1. 研究開始当初の背景

地域のアイデンティティを構成する主要素である歴史的建造物や文化遺産、生活に根ざした歴史的町並みや景観を、地域の発展とどのように結びつけていくのかという問いは、洋の東西を問わず多くの都市の共通課題となっている。わが国でも、2004年に景観法が策定されたことにより、都市景観を保全することの意義が確認され、保全へ向けた規制・誘導ツールが整備された。

とはいえ、どのような景観を形成あるいは保全していくのかについては、依然として具象的な方法論は確立されていないのが現状

である。つまり、景観計画・景観地区や景観形成ガイドラインといった各種ツールが整備されつつある一方、そもそも良好な景観とは何かという原論的な問いに対して、我々は有効な答えを有していない。

また、たとえ良好な景観に関して合意が形成されたとしても、それをどのように保全、整備していくかという問題がある。つまり、現状では、景観を破壊して得られる利用と所得よりも景観の魅力を活用して得られる所得の方が地域にとって大きいかどうかを判断する基準に欠けていること、そしてそうした評価手法的な問題に加えて、景観の保全が

経済的な利益を生み出すような仕組みづくりが不足している。景観をめぐる政策について、「総論賛成各論反対」の状況に陥らないためにも、景観保全に関する政策的なモデル構築が必要とされている。

一方、フランスの諸都市は、1980年代から基礎自治体に許容される都市計画を駆逐することで、都市固有の歴史的環境を保全しつつ効率的な土地利用を図り、既成市街地の保全および活性化に取り組んできた。フランスでは、地域コミュニティに根ざした人間らしい生活の質の向上を念頭に置いた漸進的で小規模な修復型の地域開発が実施されてきている。

その際、鍵を握るのが景観の扱いである。フランスでは、特筆すべき景観が残っているわけではない市街地においても、景観が地域の経済的発展の重要な手段となっており、ゆえにこれらの景観を雇用と所得の資源として管理し、再生することが望ましいと考えられている。

2. 研究の目的

本研究は、良好な景観に対する合意を形成するための制度構築の必要性および景観保全がより利益を生み出すような仕組み作りの必要性に鑑み、日仏国際比較を通じて、経済開発と整合性を持たせるためのモデル構築および制度設計を目的とする。

具体的には、わが国における景観形成および保全を巡る現況と評価、フランスにおける景観保全の原理と手法の制度論的アプローチによる解明、両者の比較検討によるわが国への政策的インプリケーションの導出、を目的とする。

3. 研究の方法

本研究は段階的に達成すべき目標として以下のフェーズを設定した。

- (1) わが国における景観形成および保全に関する歴史的経緯の把握
- (2) わが国の各自治体における景観行政の現状（到達点と実施上の問題点）の整理
- (3) フランスにおける景観政策の現状の分析
- (4) わが国における景観計画策定ならびに実施を支援する制度的提案
- (5) フランスの景観政策の特性の解明
- (6) わが国における景観保全と経済開発の整合を持たせるためのモデル構築

これらを達成するための方法として、本研究は、両国における景観政策の現況に関する一次資料の読解・整理、現地でのフィールド調査ならびに現地の専門家との討論、国内外の複数の専門家を招聘してのシンポジウム、を行った。

4. 研究成果

現在、二年度に及んだ研究の成果のとりまとめ中である。ここでは、現在作成中の論文の中から、そのいくつかの論点を挙げる。

(1) ナンシー市の景観政策と経済発展のパランスの分析

本研究における現地フィールド調査により、①ナンシー都市圏開発局（Agence de Développement et d'Urbanisme de l'Aire Urbaine Nancéienne, ADUAN）、②ナンシー市都市計画局、③ナンシー広域都市圏連合（Grand Nancy）においてインタビュー調査を行った。

① ナンシーはムルト・エ・モゼル県人口約100万人）の県庁所在地であり、都市圏レベルでは約40万人規模となっている。市の人口は約10.5万人である。ナンシー広域都市圏連合はナンシー市とその周辺の合計20市町村で形成する広域都市圏であり、その人口は約25.8万人である。

② 2007年6月の高速列車の整備開通に伴い、ナンシーはパリやフランス東部の諸都市から90分の距離にある主要な経済ハブとして浮上してきた。また、ベルギーやドイツ、ルクセンブルクといった欧州の主要な市場からも近いという地理上の利点もある。この事実は、半径200kmに2400万人の潜在的な消費者を抱えていることを意味する。エピナル（Epinal）、ナンシー、メス、Thionvilleからルクセンブルクへと連なる都市の軸はユーロリージョン「Sillon Lorrain」を形成し、その人口は120万人、圏内の企業数は約5.8万に上っている。

③ ロレーヌ地方圏（人口250万人）の経済の中心地として、ナンシーは2.3万の企業を抱え、17万の雇用、そして1.3万の高度熟練職業を生み出している。多国籍企業は112を数える（合計19の国が関係している）。39の産業団地を有し、その面積は100エーカーに及ぶ。中でも、次世代のインキュベーション企業の育成を図る情報技術関係のメディア・パーク（10エーカー）の取り組みが興味深い。また、3つの大学（ロレーヌ工科大学、鉦山地質大学、美術大学）には合計約7万人の学生が学んでいる。フランス国内で最も学生の比率が高い地域のひとつである。

④ ナンシーは住みやすい都市としても知られている。2006年には、ある有力なフランス誌において最も住みやすい都市第一位に選出された。180の欧州都市（20万人の住民）を対象とするDATARの調査（2004年3月実施）は、ナンシー広域都市圏連合を単なる地理的な範囲を越えた、国家的に重要なリージョンとして位置づけている。

⑤ 文化的景観や歴史的町並み、自然環境の

保全は、単一の自治体のみによる施策ではなく、広域的な連続性を有するものとして、広域連合の重要な政策課題となっている。

⑥ ナンシーの旧市街は数多くの歴史文化遺産に恵まれ、中心部のスタニスラス広場、カリエール広場、アリアンス広場はユネスコの世界遺産に登録されている。現在でも市の約17%の人口が住まう旧市街には、1962年のマルロー法に基づいて導入された保全地区 (Secteur Sauvegardé) が指定されており、厳格な建築コントロールのもと約150ヘクタールにわたり景観保全が実施されている。また、旧市街から南に伸びる界限(約25ha)には建築的・都市的・景観的文化遺産保存区域(ZPPAUP)が指定され、居住環境改善とあわせた包括的な景観保全が試みられている。

⑦ 最後に、フランスの全国的な歴史的環境保全ネットワークを行う組織である「フランスの最も美しい村協会」に関する論考を日本計画行政学会に現在投稿中である。

(2) わが国の土木遺産・文化遺産の保全活用論の構築

従来は取り上げられる頻度が高くはなかった、わが国の土木構造物を文化遺産保護の視点から捉え直した論説や、わが国における風景の出現と空間の豊かさについての論説、景観を構成する重要な要素のひとつである街路樹の役割を論じた記事等を発表している。さらに、歴史遺産としての土木構造物だけでなく、将来的に地域における重要な社会基盤ならびに景観資源になりうるダムに関する書籍も上梓した。

(3) 戦略としての「創造都市」や「文化的景観」を活用した地域再生論の構築

2008年2月に、国内外から複数の専門家(都市計画、土木設計、文化財保存、経済、地域開発など)を招き、地域の経済的発展の状況下で景観はどのように保全されていくべきかを問う、日仏比較のシンポジウム

”Cultural Landscape in Future”を開催し(会場:政策研究大学院大学)、景観保全と経済発展について複合的な分析を行った。なお、このシンポジウムに併せて、フランスからは本研究の共同研究者であるクサビエ・グレフ教授(パリ第一大学)ならびにナタリー・ベルトラン氏(CEMAGREF:農業・環境工学研究所)を招聘した。

また、2009年1月には、欧州の都市再生・地域再生の専門家であるクラウス・クンツマン教授(ドルトムント大学)を招き、景観を軸に都市を再生する新たなパラダイムとしての「創造都市」の可能性についての講演会『クリエイティブ・シティ:都市を再生する新たなパラダイムか、それとも一過性のファッションか?』(会場:政策研究大学院大学)を開催し、経済の重要性をいかに持続可能な

都市空間に反映させていくかについて有意義な議論ならびに意見交換を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

- ① 篠原修:「戦後の土木構造物(橋梁)概観」、『文化庁月報』、Vol.474、2008年3月
- ② 篠原修:「オープン・カフェを超えて 真のまちの活力とは」、『CEL』、Vol.84、2008年3月
- ③ 西村幸夫:「景観コントロールの論理 都市計画の視点から」、『日本不動産学会誌』、Vol.22, No.3, pp.34-36, 2008
- ④ 西村幸夫:「歴史まちづくり法の特色と法制定の意義」、『季刊まちづくり』、No.21, pp.90-93, 2008
- ⑤ 西村幸夫:「文化遺産と歴史的環境の再生へ向けての計画論の現状と今後」、『ランドスケープ研究』、Vol.72, No.2, pp.154-157, 2008
- ⑥ 篠原修:「風景の出現と空間の豊かさ」、『交通工学』、Vol.42、2007年10月
- ⑦ 篠原修:「コンペ文化育成への課題」、『橋梁と基礎』、Vol.41、2007年8月
- ⑧ 篠原修:「日本人にとって街路樹とは」、『都市緑化技術』、Vol.64、2007年7月

[学会発表](計8件)

- ① 篠原修:「都市の移動風景を再生する」、交通まちづくり研究小委員会、東京大学、2009年3月
- ② 篠原修:「30年でなしたこと、100年でなしてゆくこと 山形・金山町」、GSデザイン会議連続シンポジウム「まちづくりへのブレイクスルー」、東京大学、2009年1月
- ③ 篠原修:「風景の奥へ」、土木学会景観・デザイン委員会研究発表会、熊本大学、2008年12月
- ④ 篠原修:「小樽運河と石造倉庫群の保存運動から何を受け継ぐか」、日本建築学会於小樽市民センター、2008年11月
- ⑤ 篠原修:「匿名性からの脱却」、土木学会・土木の日記念行事シンポジウム、2008年11月
- ⑥ 篠原修:「美しい国づくり政策大綱にもとづく公共事業の展開 東北地方における取り組み」、土木学会全国大会研究討論会、東北大学、2008年9月
- ⑦ 篠原修:「水を集め、見捨てられた川を再び故郷の宝に 三島・源兵衛川」、GSデザイン会議連続シンポジウム「まちづくりへのブレイクスルー」、東京大学、2008年9月
- ⑧ 篠原修:「森をつないで、都市河川を地元

の川に 横浜・和泉川」、GS デザイン会議
連続シンポジウム「まちづくりへのプレイ
クスルー」、東京大学、2008年5月

[図書] (計3件)

- ① Yukio Nishimura: “Renovation of Modern Stock”, *Stock Management for Sustainable Urban Regeneration*, Springer, pp.33-55, 2008
- ② 篠原修:『ピカソを超える者は 景観工学の誕生と鈴木忠義』、技法堂出版、2008年
- ③ 篠原修:、『ダム空間をトータルにデザインする GS 群団前走記』、山海堂、2007年

[その他]

- 講演会・座談会など (計7件)
- ① 篠原修:「景観法と文化的景観にどう取り組むか」、静岡県景観実務講習会、静岡県
- ② 篠原修:「文化的景観が意味するもの」、全国史跡整備市町村協議会役員会、全国史跡整備市町村協議会
- ③ 篠原修:「熱海地域のまちの将来像を考えるひととき」、熱海市まちづくりシンポジウム、熱海市
- ④ 篠原修:「景観は誰のものかー公有・私有・共有」、青梅市景観まちづくりシンポジウム、青梅市
- ⑤ 篠原修:「風景の奥に在るもの」中越大震災復旧工事完了記念シンポジウム、新潟県
- ⑥ 篠原修:「文化的景観の意味とそれが「まちづくり」に示唆するもの」、京都府景観まちづくりフォーラム、宇治市文化的景観連続フォーラム、京都府、宇治市
- ⑦ 篠原修:「文化的景観の可能性」、四万十川流域重要文化的景観選定記念シンポジウム、四万十川財団

○ シンポジウムの開催 (計2件)

- ① 専門家会議 Cultural Landscape in Future
 - プログラム内容:《第一部:文化遺産の保護》+《第二部:新たなコンセプトとしての文化的景観:その保全と活用》
 - 主な発表者:クサビエ・グレフ(ソルボンヌ=パリ第一大学教授)、Seung-yong Uhm(韓国文化庁)、根木昭(東京芸術大学教授)、篠原修(政策研究大学院大学教授)、ナタリー・ベルトラン(フランス農業・環境工学研究所・研究員)、稲葉信子(東京文化財研究所、当時)、垣内恵美子(政策研究大学院大学教授)
 - 日時:2008年2月5日
 - 会場:政策研究大学院大学
 - 参加人数:約30名
- ② 「創造都市/クリエイティブ・シティ」特別講演会

- 題目:『クリエイティブ・シティ:都市を再生する新たなパラダイムか、それとも一過性のファッションか?』
- 講演者:クラウス・クンツマン教授(都市地域計画、ドルトムント大学)
- 日時:2009年1月6日
- 会場:政策研究大学院大学
- 参加人数:約40名

6. 研究組織

(1) 研究代表者

篠原 修 (SHINOHARA OSAMU)
政策研究大学院大学・政策研究科・教授
研究者番号:70101110

(2) 研究分担者

垣内 恵美子 (KAKIUCHI EMIKO)
政策研究大学院大学・政策研究科・教授
研究者番号:90263029

阿部 大輔 (ABE DAISUKE)

東京大学・工学系研究科・特任助教
研究者番号:50447596

(3) 連携研究者

西村 幸夫 (NISHIMURA YUKIO)
東京大学・工学系研究科・教授
研究者番号:20159081

鳥海 基樹 (TORIUMI MOTOKI)

首都大学東京・都市環境科学研究科・准教授
研究者番号:20343395

(4) 研究協力者

クサビエ・グレフ
ソルボンヌ=パリ第一大学・教授

ナタリー・ベルトラン

フランス農業・環境工学研究所 (CEMAGREF)
・研究員